地域の医療連携の中核を担う

りんくう総合医療センター

問合先　地域医療連携室（☎469-3111 Fax469-7929）

呼吸器外科

呼吸器センター長兼呼吸器外科部長　大森謙一

呼吸器外科では、肺癌や転移性肺腫瘍などの肺の腫瘍や、縦隔や胸壁の腫瘍に対する手術、その他、膿胸や気胸に対する外科的な処置や手術を行っています。従来では肋骨を切ったり、胸骨を切ったりなど、開胸して行うことが多かった手術も、今ではほとんどが胸腔鏡を用いて小さな切開創で手術を行っています。このことにより術後の回復が早くなり、高齢の人でも手術後1週間程度で退院できるようになっています。

呼吸器外科で行う手術のうち約半数が肺癌の手術です。日本全国で肺癌と診断される患者数は年々増加しており、1年間で12万人近い人が肺癌と診断され、約4万人が手術を受けられています。肺癌も、超高齢といわれるような人の手術が増えています。ここ数年に手術を受けられた中で、80歳以上の患者さんの割合は15％近くになっています。高齢の人では肺の予備能が少なくなっており、併存疾患も多数あります。胸腔鏡手術は、高齢の人が術後合併症を起こさないよう、活動性が落ちないようにするのに役立っていると考えています。

また、当院では呼吸器内科、総合内科・感染症内科、肺腫瘍内科、救急診療科の医師が呼吸器疾患の診療にあたっています。当科では気胸や膿胸に対して、外科的な処置や治療のタイミングを逃さないように協力体制を築いています。そして、外科的な処置治療だけでなく診断領域においても積極的に対応して、地域の呼吸器疾患の診療に貢献できるように心がけています。

検査科

肺腫瘍内科部長兼検体検査管理者　森山あづさ

みなさんは病院に来院された時に検査科の場所をご存知でしょうか。採血や点滴などの処置を受ける3階Hブロックのさらに奥にあるため、場所的には目立たない場所です。

しかし、患者さんの診断・治療には大きく関わり、日々診療の重要な部分を占めています。問診、診察だけでは診断のつかない患者さんの多くは、必要な検査を受けていただくことになります。今回は、発熱と息切れの症状が出現し、病院を受診したときの経過を見てみましょう。発熱の程度を調べるために血液検査を行い、白血球数などの炎症反応を調べます。肝臓や腎臓など内臓の機能と、糖尿のある人は血糖値も調べましょう。痰が出るようであれば喀痰の細菌検査を行い原因菌を調べ、体力が落ちていて肺結核が疑われるときは結核菌なども調べます。動いた時の息切れや足のむくみが出てきたときには、心臓の機能を調べるために心電図や心エコー検査、息切れや喘息疑いと言われた患者さんには呼吸機能検査（肺活量）も必要です。

また、腫瘍を疑われた時には生検し（細胞を採り）、細胞や組織を調べて病理診断（良性か悪性か）を行います。すぐに結果が出るものではなく、約1週間程度かかるので、診断が出るまで辛いものです。

以上、検体検査、細菌検査、生理検査、病理検査をまとめたものが検査科です。受診したからといって、すべての検査を受けるものではありません。なるべく体の負担にならないように必要な検査を担当診療科で相談しましょう。そして的確な診断結果が得られ、適切な治療計画に結び付くことを検査科スタッフは総力を上げて日々願っています。